

民数記 36 章。民数記の最後の章ということで最も重要な締めくくりの言葉が、最後の言葉として私たちに与えられております。早速 1 節、2 節をお読みいたします。『¹ヨセフ族の一つ、マナセの子マキルの子ギルアデの氏族に属する諸家族のかしらたちが進み出て、モーセとイスラエル人の諸家族のかしらである家長たちに訴えて、² 言った。「主は、あの土地をくじによってイスラエル人に相続地として与えるように、あなたに命じられました。そしてまた、私たちの親類ツェロフハデの相続地を、彼の娘たちに与えるように、あなたは主に命じられています。』ここにヨセフ族の一つ、ヨセフというのはヤコブの最も愛した最愛の息子の 1 人で、12 人のうちの 1 人であって、そしてこのヨセフ族から 2 人の息子が、ヤコブの孫が生まれまして、それぞれが大きな民族を、部族として成していきます。その一つがマナセ族で、もう一つがエフライム族という部族ですけれども、ここではそのマナセ族のリーダーの 1 人がモーセのところへ相談に行っております。「ここに大きな問題が生じました。大きなジレンマが生じましたと。とても自分たちではこのことを解決出来ませんと。」そしてモーセにそのことを相談しに行くわけです。

その問題と言うのは、既に民数記 27 章でその発端を私たちは見てきました。ツェロフハデの娘が 5 人モーセのところへ相談に行っております。何の相談かと言いますと、そのツェロフハデは男子を残さずに娘だけを残して世を去ってしまいました。父親を亡くして不安の中で、さらに追い討ちをかけるようにイスラエルがこれから入っていく約束の地では男子だけが土地を相続していくと。そうなりますと、この 5 人の娘はお父さんも亡くなり、息子も残さずに亡くなってしまったので、路頭に迷ってしまうのではないかと。それでは自分たち娘たちはどうやって暮らしていったらいいのか。何を頼りに、何を伝に暮らしていったらいいのか。新しい土地には当然頼るものはありません。自分たちで開拓して行かなければなりません。女性たちだけでこれからの新しい生活を切り盛りしていくには大変であります。今日のように社会福祉制度が確立されていたわけではありません。常に男性の、霊的リーダーの父親、また長男の庇護の下に女性たちは暮らしてることができましたが、モーセの定めた律法によれば長子だけが、息子だけがこの約束の地における相続地というものを相続していくことが出来るということで、これでは私たちは困りますと。何とかして下さいと。そのような相談をモーセにして、モーセもこのことを厳粛に受け止めて、そして神様にそのことを伺いに行きました。で、神様からの直接の答えを頂いて、このツェロフハデの娘たちは土地を相続する権利を持っているということで、この女性たちは土地を約束されて、そして約束の地に入ることを許されました。

で、その時にひとつのジレンマになる問題が同時に生じてしまいました。その問題というのは、仮にこのツェロフハデの娘たちが、イスラエルには 12 部族ありまして、他部族の男性と結婚するようなことがあれば、その娘たちがマナセ族で相続しているその土地が夫の他部族の方に移行してしまうのではないかと。そうするとマナセ族の相続地は、領地はどんどん減ってしまうのではないかと。それでは不公平であると。このツェロフハデの娘たちが言った言い分、主張というのは正しかったので、勇気を持って彼女たちはその正しいことを信じて行動に出ました。そのことを神様も評価して彼女たちに応えて下さいましたが、同時にこの 36 章で生じている問題の背後にあるそれをそのまま実行する上で他部族に彼女たちが結婚して吸収されていくようなことがあれば、他の人たちにも損害が生じてしまうと。マナセ族の土地が減ってしまうという、このことにおいてもこれは正しい訴えとして神様にモーセは伺いを立てに行きます。

そしてその続きとして 3 節、4 節に『³もし彼女たちが、イスラエル人の他の部族の息子たちにとついだなら、彼女たちの相続地は、私たちの父祖の相続地から差し引かれて、彼女たちがとつぐ部族の相続地に加えられましょう。こうして私たちの相続の地所は減ることになります。⁴ イスラエル人のヨベルの年になれば、彼女たちの相続地は、彼女たちのとつぐ部族の相続地に加えられ、彼女たちの相続地は、私たちの父祖の部族の相続地から差し引かれることになります。』言い分はもつともだと言いました。

そして 5 節から『⁵そこでモーセは、主の命により、イスラエル人に命じて言った。「ヨセフ部族の訴えはもっともである。⁶ 主がツェロフハデの娘たちについて命じて仰せられたことは次のとおりである。『彼女たちは、その心にかなく人にとついでよい。ただし、彼女たちの父の部族に属する氏族にとつがなければならない。』⁷ イスラエル人の相続地は、一つの部族から他の部族に移してはならない。イスラエル人は、おのおのその父祖の部族の相続地を堅く守らなければならないからである。⁸ イスラエル人の部族のうち、相続地を受け継ぐ娘はみな、その父の部族に属する氏族のひとりにとつがなければならない。イスラエル人が、おのおのその父祖の相続地を受け継ぐためである。⁹ こうして相続地は、一つの部族から他の部族に移してはならない。イスラエル人の部族は、おのおのその相続地を堅く守らなければならないからである。』』ツェロフハデの娘たちの訴えも至極もっともで正しいものである。そしてマナセ族の、彼女たちが属するマナセ族のリーダーたちの訴えもこれも至極もっともであると。男子がいなければ父親の名前も消えてしまう。家督相続も出来ずに土地も与えられない。そして彼女たちがここで土地を相続して他部族に嫁いでしまえば、マナセ族の領地はどんどん減ってしまうであろうと。両方の主張が正しいわけですから、これはちょっとしたジレンマということで悩むわけですが、モーセはその際にすぐに主のもとに相談に行っております。私たちにもこれは大切な実践的な模範であります。片方の主張も、もう片方の主張も正しい。どちらも正しいので私たちは悩みます。揺れ動きます。どちらを取ったらいいのか。私たちは自分の知恵に頼る必要はありません。そういう時にこそ主に伺いを立てて、主から答えを頂くことが出来ます。

そして冒頭にも申し上げたように、この **36 章**こそが**民数記**の最後の章であって、最後の言葉であって、総集編であって、まとめであって、一番重要なポイントとなると。これまでの荒野の旅においていろいろなレッスンがイスラエルには与えられてきました。いろいろな指示や警告が与えられてきましたが、この **36 章**の内容こそが実はイスラエル民族全体にとっても最重要となるレッスン、ポイントとなります。約束の地に入るにあたって彼らはまず数を数えられて、それぞれイスラエルには 12 部族が分かれておりましたのでそれぞれに属するという事。そして属するだけではなくて、それぞれ属せば彼らは 1 つとなって一致してそれぞれの主からの召しに従って与えられた賜物を用いて主に仕えていく。そのようにして彼らは整えられて、成長して、約束の地に入るにふさわしいものとなっていくわけです。約束の地に入るにあたっては、巨人たちが待ち受けております。そこでは戦^いが待っております。そのために彼らは整えられて、強められて、さらに主との関係を深いものとし、親密なものとしていく必要があります。ですから**民数記**は私たち教会にとっても非常に重要で実践的な内容です。約束の地に入るためには、聖霊に満たされて、さらに神様との深い親密な関係を求めていく上では、私たちもまた整えられて、教会という信仰の共同体も組織として十分に機能を果たしていく上で、主の指示に従って、主の戒めに倣って、主の警告をしっかりと受け止めて、一丸となって歩んでいく必要があります。ですから**民数記**というのは教会運営にとっても非常に重要な書であります。たとえばあなたが信仰告白をして、洗礼を受けて、バプテスマを受けて、そして教会員となって、教会で奉仕をして、毎週のように教会活動に勤^{いそ}んでいたとしても、何年も同じところをグルグル回っているならば、イスラエルの荒野の民のように何年も何十年も同じところをグルグル堂々巡りをしているならば。堂々巡りというのはちなみに仏堂などの仏教のお寺のようなどころをグルグル回るとい言葉から来ています。神様をお願いをして、お祈りをして、お寺の周りを何度も何度もグルグル回るとを堂々巡りと言います。でもそれは虚しいということが、日本人が考えて堂々巡りと。お寺の周りを何回周^{まわ}ろうと、同じことを繰り返しお願いしても、それでも埒^{らち}があかないと。そこから生じた言葉ですけれども、私たちがひよっとしたら教会という、教会堂というお堂の周りを何度も何度もグルグル回りながら。祈ってはいます。賛美もしています。教会でいろいろな活動もしていますと。でも同じところを、同じ霊的なコンディションのままで、特別成長もなく、改善もなく、現状維持のままで、救われた数年前と何ら変わらない。若しくはそこから退歩している。さらに退化している。そんなようなところを私たちがグルグルグルグル回って、その都度神様に疑いを持ち、そしてその都度不平不満を漏らし、その都度反逆をしている。それでも救われていることは間違いありません。でもそれで良いのでしょうか。救われていることだけで私たちは満足すべきではありません。もしあなたが荒野の旅をしているならば、同じところを回って堂々巡りをしているならば、主はあなたにこの**民数記**を与えておられます。そのままで良いの

だろうか。良いはずがないではないかと。

そして今日はこの最後を締めくくる上で、まさに私たちにとっては決定的な、この問題を処理しなければ、この問題に真剣に取り組まなければ、私たちは堂々巡りから抜け出せないということ。約束の地に入る前にどうしてもこれだけはクリアにしなければいけない。解決しなければならない。ちゃんと対応しなければいけないということをここに指示されています。そこまで前置きをしましたけれども、それを端的に言いますと、一言でその最後の重要なポイントとは、最後のその重要な課題とは、そのイシューというのは、一体何なんでしょうか。それはあなたが誰と結婚するかという問題であります。誰と結婚するかについてあなたは細心の注意を払わなければならない。その結婚相手をめぐって主はここにひとつの最後の指示というもの、インストラクションを与えております。非常に興味深いです。ここまで前置きの中では、このポイントが一番重要である、これが最後の言葉であると。民数記を、荒野の民の放浪の放浪記を締めくくる上でこれが最後である。約束の地に入るにあたって一番重要な事を最後言い残して。モーセもこの後天に召されていくわけですがけれども、誰と結婚するかによってすべては変わります。場合によっては本来あなたが神様から受け取るはずのものを受け取れなくなってしまうかもしれません。すなわち霊的な相続というものをあなたは受け取れないかもしれません。相続地が減ってしまうかもしれません。相続地がなくなってしまうかもしれません。本来あなたが受けるべき様々な祝福をあなたが受け損なってしまうかもしれない。誰と結婚するかによってです。これは非常に大きいということをお伝えしておきたいと思います。

新約聖書、第二コリント 6:14 以降を今開いて頂ければと思います。『¹⁴ 不信者と(ノンクリスチャンと、異教徒と)、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみに、どんな交わりがあるでしょう。¹⁵ キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう。(ベリアルというのはちなみにヘブル語由来で、意味は“無価値”という意味です。価値がない。このベリアルというのは、悪魔・サタンの別称であります。ですから「キリストとサタンとに何の調和があるでしょう。」と読んでも差し支えありません。) 信者と不信者とに(クリスチャンとノンクリスチャンとに)、何のかかわりがあるでしょう。¹⁶ 神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。¹⁷ それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、¹⁸ わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。』」つり合わぬくびきを負ってはなりませんと、ここにいる皆さんにもこの命令は与えられております。つり合わぬくびき。不揃い、不均衡であると。不自然な組み合わせであるということです。

このフレーズというのは、パウロが勿論旧約聖書のフレーズを意識して使っています。パウロのユニークな独特の言い回しではなくて、これは旧約聖書からとられた慣用句と言って良いと思います。その旧約聖書のどこから取られているかと言いますと、申命記 22:10 から、このつり合わぬくびきとは一体どういうものか、ということが見られます。パウロの言うつり合わぬくびきの典拠は申命記 22:10 です。ですからこれは新約聖書の教えというわけではありません。旧約聖書の教えでもあり、聖書 66 巻を貫く普遍的なメッセージということです。古代においても、現代においても通ずるメッセージということです。『牛とろばとを組にして耕してはならない。』牛とろばは、当然体格が違います。「組にして」と言う時には、くびきというものを使います。くびきというのは二頭の動物の首に木製のその体格にあった物を着けて、そしてその二頭に鋤など耕す道具を装着して、そして二頭に引かせる。トラクターのような役割を果たさせるんですが、その際に二頭の家畜は同じような体格でなければ、どちらかに偏ってうまく耕せませんし、また二頭の動物同士ではお互いに傷つけ合ってしまいます。ですから必ず二頭のトラクターの役割を果たすこの動物は、同じような体格で、そしてそれにピッタリ合ったくびきを身に着けて働く必要があります。それと同じように私たちもそれぞれ神様が与えられた生涯を共にするライフパートナーというものが存在するわけですが、もしこのライフパートナーが全然体格の違う、(勿論私が言うのは肉体的なことを言っているのではありません。背の高い人と低い人の話

をしているのではなくて、中身の面です。)その人生観において、その価値観において全く異なる人が一緒に生活するというのは、これはつり合わぬくびきを負って生活するようなもので、お互いに引っ張り合ったり、お互いにお互いぶつかりあったり、お互いに傷つけて、お互いの足を引っ張ってしまって、効果的な効率的な実りある生活を送ることは出来ません。パウロはそのことを旧約聖書の牛とろばが丁度くびきを引くように、つり合わぬくびきを負うというのは、これは良くないことであると。

そして他にも**アモス 3:3**というところにも目を留めて頂きたいと思います。『**ふたりの者は、仲がよくないのに、いっしょに歩くだらうか。**』当たり前のことを言っています。でも、仲が良くないのに一緒に歩んでいる夫婦は結構いるかもしれませんが、ここでは「**仲がよくない**」と訳されていますけれども、他の聖書の訳によっては「**同意をせずに**」英語の聖書では“agree”という言葉が使われています。同意をせずに、合意をせずにふたりの人が歩いてもらくな事はありません。同じ考えを持っていない、同じ価値観を持っていない、同じゴール、同じ動機を持っていない者同士が歩むという事は、これはいろいろなトラブルを引き起こす原因となっていきます。人生を共に歩む生涯のパートナー、すなわち夫婦が、もし同じ人生観を持っていないならば、同じ信仰を持っていないならば、これは大変なことです。これは夫婦に留まりません。自分の生活を左右するほどのビジネスパートナー、これもそうです。商売をしている人が相手にするお客さんと違まして、まさに共同投資をするような、お互いがなければビジネスが成立しないような、そんなまるで夫婦のようなビジネスパートナーも、この御言葉に該当するかと思います。生涯を共にする、人生を左右するほどのライフパートナー。夫婦であれ、ビジネスパートナーであれ、私たちは同じ思いで同意をして、合意をして同じくびきを負っていく必要があります。このような命令を多くのクリスチャンたちが重要視せずに無視してしまった結果、沢山の痛みを、沢山の悲劇を経験しているのを、私はこの目で見ております。彼らが本来体験出来るはずの素晴らしい祝福を、喜びを受けられていない姿を私は沢山見えています。本来受けるべき相続地を、彼らが受け取っていない姿を沢山見えています。頭痛を抱え、悩みを抱え、そしていろいろなものに制限がつけられ、限界ができてしまって、そして多くのものを失っていく。そのようなつり合わぬくびきを負ってしまっている信者の夫婦、家庭を沢山見えています。

今ここに集まっている皆さんの中にも結婚している人たちが大勢おります。手遅れだと思わないで下さい。是非あなたの子供に、孫に今日のメッセージをそのままお伝え頂きたいと思います。もし、あなたが他の部族の者と結婚するならば、あなたが本来受けるべき相続地を、本来味わえるはずの祝福を、喜びを味わえなくなってしまう。神の国という素晴らしい相続を、キリストにある霊的な資産を私たちが受けられなくなってしまう恐れがあるということ。得るべきものを失ってしまうということ、是非あなたの子供に、また孫に繰り返し繰り返し強く大胆に語って頂きたいと思います。

結婚は地上で最も天国に近いものだ。これも事実かもしれませんが、結婚は地上で最も地獄に近いところだ。これもまた事実かもしれませんが、結婚は天国にも地獄にもなり得るということです。もし私たちが聖書の言葉に耳を傾けないならば、耳を塞いでしまって自分の思いのままに生きたいと、自分の考えを貫きたいと決心してしまうならば、結婚は地上で最も地獄に近いところに成り下がってしまうかもしれません。是非ここで皆さんに、つり合わぬくびきを負うということがどういうことか。それはクリスチャンとノンクリスチャンが結婚するということは、聖書では明確に禁じられていることであり、それをすれば間違いなく不幸が、悲劇が、苦悩が、頭痛が待っているということ。このことを私も皆さんには何度となくこれまでも警告してきましたし、その重要性は時間をかけて分かち合ってきましたけれども、なぜここまで何度も繰り返して言うかという、聖書に繰り返して書かれている。これもひとつそうですけれども、私はそのつり合わぬくびきによって、そこに与えられた子どもたちがどれほど苦しめられて、振り回されて、傷ついてきているのか、それを知っているからです。そして私も実はそのようなつり合わぬくびきの夫婦によって育てられた1人として非常に重いものを感じております。ただ幸い神様の憐れみがありましたので、私の両親はいろいろなところを通して、家庭崩壊もありました。でも、神様の憐れみと恵みによって夫婦は今も離婚せずに教会生活を送っております。そして私もこうして主によって救われて、そして牧師として今は御言葉を分かち合うという特権に与っております。で

すから私もそのようなつり合わぬくびきを負った夫婦に、両親に育てられて、そしてその弊害というものを身をもって体験しております。家族の関係は引き離され、心が張り裂けるような、そんなところを私も通ってきました。そして私はある意味で結果的には神様の憐れみを受けて今こうして幸いな状態に変えられましたけれども、しかし多くはいまだにその傷を負って、いまだに家族は崩壊したままで、そしてその子供もその孫も結局はつり合わぬくびきを負っていく。またはクリスチャンホームに生まれ育ったのに、結局はクリスチャンにならずに不信者のままで生きていく。そのような夫婦を、家庭を沢山見ておりますので、私も心を痛めておりますが、私以上に心を痛めているのは、他ならぬ私たちが造られた、私たちが愛して止まない神様ご自身だということも知っているのです、今皆さんに厳しい言葉を浴びせることになると思いますけれども、是非神様のハートを知って頂いて、これが最後の言葉である。民数記の最後の、最重要の言葉であるということをは是非受け止めて頂きたいと思っております。

そしてくびきの話をしておりますけれども、では「くびき」とは一体霊的には、象徴的には何を具体的に指すのか。マタイ 11:28、皆さんもよくご存知な箇所です。イエスキリストの言葉です。『²⁸すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。²⁹わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。³⁰わたしのくびきは負いやしく、わたしの荷は軽いからです。』イエスはここで 2 回「わたしのくびき」と繰り返しております。イエスが負うくびきとは、“yoke”とは一体何であるのか。私たちは今イエスと共に歩む幸いな人生を与えられています。それは言い換えれば、イエスと共にくびきを負う人生です。イエスのくびきとは明らかです。それは十字架であります。イエスと共に私たちも十字架を背負って生きます。イエスは「私についてきたいならば、あなたはあなたの十字架を負うようにと。ただ、もしあなたが疲れてしまって重荷を負っているならば、私のところに来なさいと。」結局私たちが負う十字架というのは、私たちの十字架でありながらも主が共に負って下さる十字架でありますから、孤軍奮闘するようなものではありません。一生重苦しい思いをして、惨めな思いをして、下を向きながら、苦しみながら、歯をくいしばりながら、自分の十字架を背負っていく。そのようなイメージを持っているならば、それは全く間違っておりますので、主が喜んで負ってくださった十字架です。嫌々ながらではないんです。強いられてではありません。十字架に掛かったのは他ならぬあなたのためです。あなたをどれほど愛しているのか、神様の愛が分かりません。その人は是非十字架の足元に行ってください。どれほどイエス・キリストがあなたのことを愛しておられるのか。十字架の足元に行けば分かるはずですよ。ですからイエスのくびきというのは、負わせられるものと言うよりも、重苦しいものと言うよりも、本当は嫌だけど避けて通れないと言うものよりも、むしろ自発的な愛のくびきであるということです。

そして同時にイザヤ 9:6 に、これも有名なイエス・キリストの預言の箇所です。イエスが赤ちゃんとしてこの世に与えられるという『**ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。**（これが赤ちゃんとしてこの世に来るイエス・キリストの預言であります。イエスがこの世に来る、この世に来るといのは今から 2000 年前の最初のクリスマスのことですが、それよりもさらに 750 年も遡ってこの言葉が預言として与えられています。イエスが生まれる 750 年前の預言です。その続きに）**主権はその肩にあり**』イエス・キリストの肩には主権がある。英語の聖書ではこの「主権」という言葉を“government”というふうに訳しています。“government”と言えば「政府、国」というふうに訳されますが「支配」というふうにも訳せます。イエス・キリストの肩には十字架だけではなくて、十字架の愛によって私たちが支配する力が、権威があるということです。ですからイエスは「私のくびきを負いなさい。」と私たちに招きの言葉を与えておられます。それは負いやしくいんだと。英語の聖書ではその「負いやしくい」を“easy”と訳しています。イージーだと言っているんです。1 人ではとても負いきませんが、イエスのくびきであれば負いやしく、イージーである。なぜならばそのくびきは、まさに神の愛のシンボルである十字架であり、私たちがどれほど愛されているのか。イエス・キリストがその命を十字架で捧げるほどに、父なる神がその御ひとり子を与えるほどに私たちが愛されております。そしてイエスの肩には、くびきとして主権が、“government”が、その支配があるということです。あなたをイエス・キリストがコントロール

して下さるということです。イエス・キリストがあなたの人生を支配して下さるということです。これほど心強い事はありません。だからイエスはあなたを招いて「私に信頼しなさい。Trust me.」あなたがどれほど愛されているのか。そしてあなたを導いてくれる、支配してくれるお方はどれほど力があるお方なのか。コントロールして、支配して下さる方。私たちは自分の人生でいろんな問題が起こると「もうコントロール不能ですと。自分自身もどうしたらいいか分かりません。自分の欲望ですら自分でコントロールできない、自制出来ませんと。」でもイエス・キリストのくびきを負えば、それが出来ます。手に負えない問題もイエスの釘の跡のある御手によってコントロールされていきます。ですからイエスは私たちに「私のくびきを負いなさいと。」イエスと共に歩む、イエスのくびきを負う人生というのは幸いであります。このことを皆さんも改めて聞いて、イエスと共にくびきを負っていく人生がどんなに幸いなことか。そして、その同じくびきを負う者同士、即ちクリスチャン同士が夫婦として歩んでいくこと。またはビジネスパートナーでも構いません。生涯を本当に助け合って、支え合って歩んでいく、そのような関係というものがどんなに幸いなことか、再認識して頂きたいと思います。

でも残念なことに日本の多くの教会では、このことをあまり強くは主張しません。何故かということは今から、ある牧師の書いた論考を今皆さんにご披露しますので、日本のキリスト教会の牧師がこの「不信者とつり合わぬくびきを負ってはいけない。」という言葉をもどのように理解しているのか。勿論全員すべての日本人の牧師が今から読む内容に賛同するわけではありませんが、でも私の知るところでは多くの牧師はこの「不信者とつり合わぬくびきを共にしてはならない。」という**第二コリント 6：14** の言葉を今から読むような内容とほぼ変わらぬ見解を持って支持しているということを併せて皆さんにお伝えしておきたいと思います。ちょっと読ませて頂きます。抜粋したものです。

「私、結婚したいのです。」最近礼拝でお見かけする〇〇さんですが、「もしかして私に与えられた御心の人ではないでしょうか。」「残念ですね。彼は二児のパパですよ。」「ああ残念。良い方だと思ったのに。」教会に集う青年の結婚問題は深刻です。(そこから始まっております。)『不信者とつり合わぬくびきを共にするな。(第二コリント 6：14)』の教えに沿って牧師は通常相手は信者の中から選ぶようにと勧めます。

(“通常”とハッキリ書いてあります。)ところが 1%にも満たないクリスチャン人口の中で、しかも男女の比率が甚だしく不均衡。おそらく男女比 1：2。(女性が男性の 2 倍いるということです。)そのような現状では、事は容易ではありません。数値を見る限りでは半数の女性は溢れてしまうのです。この深刻な事態についての教会の対応策はとても信仰的でした。(“でした。”過去形です。)
「与えられると信じて祈り続けましょう。待ちましょう。委ねましょう。」です。確かにその熱心が報われたケースは多々ありますし、それは感謝すべきことですが、一方では無念にも諦めきれぬままに悟らされの境地に達した人も少なくありません。「独身でいることが、御心だったのよ。」と、本当にそれで良いのでしょうか。一昔前は結婚相手は牧師や長老が決めることになっていたと言います。(まあ、そういう教会も昔は多かったですね。)結婚式当日に初めて相手の顔を拝見したなどということが、従順の証のように語られたものです。(そういうことが教会でありました。昔の、一昔前のお見合い結婚もそうですね。私の祖父母も結婚式の当日まで顔も見たことがなくて、結婚式に初めて顔を見た。まあ、教会でもそのようなことが行われていました。で、この人が言うには)私が大学生の頃、カトリック信者と結婚したために教会からバッシングを受けた方がいました。況してや未信者と結婚を前提にお付き合いなどと言え、破門も覚悟、不信仰のレッテルを貼られて当然でした。イエス様は私たちが積極的にこの世に遣わすことを願われました。世から取り去るのではなく、聖別して送り出すことを願われたのです。(ヨハネの福音書 17：15～18)そして青年の結婚問題を考える時、私はもっと積極的にこの世に出て行くべきではないか、と思うのです。(ここから段々と持論が展開されていきます。で、この持論というのが今日の多くの牧師が賛同する内容であります。)私

たちの教会では牧師が勧めます。「これぞという素敵な相手を見つけたら、未信者でもいいからあなたの魅力で教会に誘いなさい。その人が真剣にあなたを愛し、あなたの神に関心を示すなら、救われるように必ず導きの手助けをしますから一度連れていらっしやい。面接をしましょう。」と。数回面接を重ねるとその人の霊的な状態は大概分かるものです。未信者は必ずしも不信者ではありません。(未信者は、未だの信者と書きます。まだ信者になっていないと。不信者は一方で、信者でならずということです。)むしろ尊い信仰予備軍と見るべきでしょう。(もっともらしく聞こえます。)勿論大風呂敷を広げてみたものの、箸にも棒にかからず、別れてしまうケースもありますが、よしんばそのような場合でもきっぱりと相手を見限るのに良いチャンスだと受け止めてもらうことにしています。幸いなことにそれは少数派です。多くの場合こうして連れて来られた青年たちは、やがて救われ、信仰告白をし、結婚へと導かれます。今では教会役員をして中心的な働きを担って下さっている方々もいます。積極的にこの世に出て、魅力的な異性と出会い、信仰に導けるなら素晴らしいことではありませんか。「未信者に魅力などない。」と反論されるなら、それは高慢だと思います。私たちはほんの少し前に救いを受けたに過ぎません。しかもそれは彼らを救いに導くという大きな責任を負うためです。この世には救いを待ち望む多くの人々がいるのです。中にはやがてクリスチャンとして光り輝くだろう魅力あふれる原石のような予備軍がいるのです。結婚は決して伝道の手段のためにあるものではありませんが、手段になっても問題は無いでしょう。青年たちよ、もっと世に出て行きましょう。キリストの香りを携えて人々を魅惑しましょう。

これは 2007 年 7 月にキリスト教の『リバイバル新聞』という新聞の連載に乗ったコラムであります。いずれにしても皆さんの中には今の抜粋を聞いて、非常に進歩的な考えの中で、むしろ私もそれには賛同しますと。確かに日本にはプロテスタント人口に限るならば 0.2% 以下です。その中で男女の比率は男が 1 に対して、女性が 2。これは飛躍ではないと思います。特にクリスチャンの女性にとって、クリスチャンの男性を、つり合いの取れるくびきを負っている男性を見つけるというのは、これは至難の業というよりも、むしろラクダが針の穴を通る方が易しいかもしれませんが、いずれにしても神に不可能な事はありませんので。今コラムを書いた人も、昔は「信仰を持って信じましょう。待ち望みましょう。」というふうに言っていたとあります。その言葉を言い換えると、「昔は信仰によって対応していたけれども、今は信仰によって対応するような時代ではないんだ。」と、そのようにも聞こえます。「今年でプロテスタントの宣教の歴史は 150 周年を迎えました。にもかかわらずプロテスタントの人口比は 0.2% 以下というのは一体どういうことでしょうか。」と多くの人から質問を受けます。色々な理由が考えられますけれども、私はそのうちの 1 つに、それは今取り扱っている問題が大きな要因であるというふうに考えています。つり合わぬくびきを負ってしまっているゆえに、日本のクリスチャンの人口も、また教会も伸び悩んでいると。同じアジアでも日本よりもプロテスタントの宣教の歴史が浅いアジアでも、韓国でも。ある人は韓国のクリスチャン人口は 4 割にも届くと言う人もいます。40%、それはちょっと多すぎるかもしれませんが、それでも 2 割とか 3 割いれば、立派なキリスト教国です。アメリカでもそんなにいません。そして隣の中国に至ってはクリスチャンの人口の数から言うならば、1 億人以上のクリスチャンがおります。共産圏であるにもかかわらずです。10%。日本は 0.2% です。一体どういうことなのか。同じアジアなのだと思うかもしれませんが。そのうちの 1 つに私は、信者と不信者、クリスチャンとノンクリスチャンのつり合わぬ結婚というものが大きな影を落としてしまっている。脚を大きく引っ張ってしまっているふうに感じられます。

外国から来た宣教師たちは、日本の今の状況を見て驚きます。0.2% という人口の話ではなくて、「街を走っているとたくさんの教会が建っていますね。なぜあれだけ教会が建っているのに、クリスチャンの人口は 0.2% なんですかと。」十字架が沢山立っているのが見えますと。ところがそれは皆ウェディングチャペルであって、長野クリスチャンセンターというところには十字架も立っておりません。マラナサ・グレ

ース・フェロシップには、十字架は立っておりませんが、それはウェディングチャペルに間違えられないようにしているわけではないんですけれども、皮肉なことに教会の数よりもウェディング専用の、しかも不思議なことにノンクリスチャンが教会のような建物で、キリスト教式の結婚式を挙げる。これは海外のクリスチャンには到底理解できないことです。韓国の人にも、中国の人にも、同じアジアの人でも理解出来ません。「一体どうしてですかと。」このような現象は日本だけです。特殊なんです。

夫婦というのは社会の最小単位というふうに言われます。夫婦関係が良ければ、親子関係も良いものです。親子関係が良ければ、社会における人間関係も、職場における関係も当然良いものが期待出来ます。今の社会が乱れきって、混乱しきっているのは、やはり家庭に問題があるということは、これは否めないことだと思います。さらに遡ればそれは夫婦の関係に求められていく。このことも昨今は否定されなくなりました。そのことを考える時に、社会の最小単位がこの社会を作り上げて、この社会の動きはこの夫婦の関係に左右されるということを世の中の人にも認めているならば、私たちはなおのこと重要視しなくてはなりません。クリスチャンの夫婦が同じ“くびき”を負って歩むということ。これは当たり前のことですが、当たり前のことが当たり前でなくなってきました。教会にクリスチャンの夫婦は実に少ないです。

「夫がノンクリスチャンです。妻がクリスチャンです。」という家庭の方が余程多いです。夫婦がクリスチャンであったとしても、子供が教会につながっている夫婦も少なくなってきました。ですからプロテスタントのクリスチャン人口比が伸びないのは当たり前です。信仰が継承されていかないからです。クリスチャンホームがなくなっていけば、当然クリスチャン人口は減っていきます。少子化が日本の大きな問題となっています。高齢化社会に輪をかけて少子化問題がありますが、それはこの日本の社会だけの問題ではなくて、実は教会におけるこの社会よりもっと深刻な問題です。物理的に肉体的にクリスチャンが子供を沢山産まないという意味ではありません。そうではなくて信仰の継承が全然なされていないということです。なぜなされないのかと言えば、夫婦がつり合わぬくびきを負ってしまっているからです。で、そのことを子供にも伝えないので、子供もつり合わぬくびきを負う。孫もつり合わぬくびきを負う。そして終いには、本来受けるべきものを、その相続地を失っていくということです。本来の祝福は、そこにはありません。日本の教会がこんなに弱いのは、こんなに弱体化して無力になってしまったのは、私は偏に、沢山の理由があると言いましたけれども、一番重要だと思うのは、私たちが聖書の言葉を額面通り受け止めていない、真摯に真剣に受け止めていないということです。『つり合わぬくびきを負ってはならない。』という言葉は私たちが、あまりにも都合よくこの社会の事情に合わせて、教会の状況に合わせて「女性信者の方が多いためから。彼女たちは結婚したいわけですから。何とか抜け道はないでしょうか。」聖書の言葉をうまいこと自分たちの都合に合わせて、人間のニーズにそれを当ててしまっている。これが大きな私は問題として、プロテスタントの人口が 150 周年の宣教の歴史を重ねても全く伸びずに、むしろ弱体化しているその原因の 1 つだというふうに確信しております。

今、日本の話をしましたけれども、USA Today というタイムマガジンとか Newsweek だとかと同じくそれなりに権威のある有名な雑誌でありますけれども、これは世俗の雑誌です。クリスチャンの雑誌ではありません。そこには、『アメリカの家庭の 22%が信仰の異なるカップル同士によるものであり、ニューヨーク市立大学の研究では、このような家庭は非常に不安定であり、信仰が同じカップルの家庭よりも 3 倍も離婚率が高いという結果が出たと言う。さらに悪いことに異なる信仰を持つもの同士が結婚した場合、互いに歩み寄るために、神について、聖書について、救いについて、非常に重要な教えについて妥協が行われ、教理そのものが軽視される傾向が強いと。ジョージ・バーナー研究員によると、(バーナー・リサーチというこれはキリスト教団体のいろいろなクリスチャンの実態を調査する団体が、統計などを取る団体があるんですが、その代表の) ジョージ・バーナー研究員によると、このような妥協は (このような妥協というのは、つり合わぬくびきを負うという妥協は) 子どもに霊的な混乱を与えるか、若しくは子供を霊

的な事柄に無関心な人に育て上げることになるという。子供たちには共通の信仰が必要なのだ。共通の信仰がなければ子供は頼るべき土台や社会、世界観を失ってしまう。そのため子供は内面の生活について、また永遠の命の選択について、確かな決断を行うことができなくなってしまう。』これは世俗の USA Today という雑誌に載った記事であります。アメリカでは離婚率は非常に高く社会問題になっておりますけれども、実はクリスチャン同士の離婚というのもの、ノンクリスチャンの離婚とその率は何ら変わらないという悲しい事態があります。なぜそういうことが起きるかと言うと、クリスチャンとは名ばかりで、キリスト教というのはただのスタイルで、教会にはクリスマスには通ってみたり。または自分は本当に救われているつもりで、天国に行けるつもりで、自分は新生したクリスチャンである、ポーン・アゲイン・クリスチャンであると自称する人たちがいますので、彼らはクリスチャンとして離婚するということになるんですけども、それは多くの場合は思い込みだというふうに考えられます。

これは、あるバプテスト系の調査団体が調べた統計ですけれども、**教会に定期的に通って毎日夫婦は祈りを持って過ごす**というような夫婦が離婚する確率というのは、全体の**1~2%**というふうに言われております。それは**3万9,000組のうち1組**というふうな確率であって、中には本当に熱心な新生したイエス・キリストのくびきを負っているような活動的なクリスチャン同士の間でも**勿論離婚**というのはありえないわけではありませんけれども、その統計は**0.00256%**というふうな数字も出ています。ですから一方ではクリスチャン同士、名ばかりのクリスチャン同士が離婚する離婚率は高いという見方もありますが、その一方では本当に真実にイエス・キリストと生きた関係を持って二人揃って心合わせて教会生活を送っている、そのような家庭における離婚というのは本当に限られているということが言われております。

今皆さんがお聞きになった中で、ひょっとしたら「ちょっと納得がいきません。今日の**民数記 36 章**の箇所から、信者と不信者がつり合わぬくびきを負う。クリスチャンとノンクリスチャンがつり合わぬくびきを負う、ということ禁じているように、この**民数記 36 章**が教えているようには、私には思えないんです。」と言う人がいるかもしれません。「あなたの解釈は納得がいきません。なぜならばこの**民数記 36 章**では、イスラエル民族同士が結婚しているのではないかと。確かにイスラエルには**12 部族**あって、ただその**12 部族**はそれぞれ同じ神を信じている。信仰の共同体ではないかと。イスラエルの子供たちの中における結婚であるから、信者と不信者との結婚とは違うのではないかと。あなたの解釈は飛躍に過ぎない。」と、非難する人もいると思ってちゃんと用意してきました。「イスラエルの人たち同士、すなわちユダヤ人同士の結婚であれば別に問題ないじゃないですかと。彼らの場合は律法によってそのお父さんの氏族同士でなければいけないと。他部族との結婚が禁じられているだけで、それは私たちには直接は当てはまらないのではないかと。」でも、旧約聖書を見て頂ければ、異教徒との結婚、いわゆる雑婚というものは明らかに禁じられています。イスラエルの民族が他の民族・異教徒と結婚することはもう言うまでもなく、このことは特に**申命記**に出て来ますから、**申命記**で詳しく学びたいと思いますが、常に神様はイスラエルの民には大前提として異民族・異教徒・不信者と結婚するということはもう論外であるということ。これはもう大前提として述べるまでもないわけですが。ただここで言われている問題は、他部族との結婚です。父の同じ氏族同士の結婚が認められるだけで、他部族との結婚は認められていません。不信者との結婚、ノンクリスチャンとの結婚はもつてのほかと言うのは、もう決まりきった大前提であります。でもここで、**36 章**で言われているのは、更に**1 歩進んだ**ことを言っているんです。当たり前のこととして異民族・異教徒・ノンクリスチャンとは結婚してはいけない。さらにこの**民数記 36 章**は踏み込んで、他部族と結婚してはいけない。むしろ父の部族・氏族の者同士と結婚しなさい。すなわちクリスチャンだったら、誰でも結婚して構わないと言っているのではありません。確かにモーセはこの**5 人**のツェロフハデの娘たちに対しては「あなたたちは自分の自由意志に基づいて好きな人たちと結婚しても構わない。」というふうには言っております。でもその一方で「それは他部族の男であってはいけない。父と同じ氏族でなければならない。」と言っているわけです。すな

わち同じような共通項を持った、同じ神観、同じ聖書観、同じ価値観、教会観を持ったような信仰者同士、仲間同士で結婚しなさいと言っているわけです。「つり合わぬくびきを負ってはいけません。ノンクリスチャンと結婚してはいけません。それは分かりました。じゃあ、クリスチャン同士だったら誰とでも結婚していいんでしょうか。」と言えば、そうではないと言っているんです。さらに踏み込んで、同じクリスチャン同士であったとしても、アメリカのそのような統計もお伝えしたのは、中には名ばかりのクリスチャンもおります。あなたとは全く違った聖書観を持ったクリスチャンたちがおります。霊的に全く一致できないようなクリスチャンも、(そういうクリスチャンは本来いないはずなんですけれども、)クリスチャンと呼ばれる人たちがおります。この中にも独身の特に娘さんたちにお伝えしたいと思います。なかなか結婚相手を見つけるのは至難の業です。その際に注意して頂きたいのは、勿論相手がクリスチャンである事はこれらもう決まりきったことですが、でもさらに加えて自分と同じハートを持つ、同じ神観、同じ聖書観、同じ教会観、同じ信仰観を持つクリスチャンと結婚して欲しいと思いますし、また自分よりも少なくとも霊的に強い人。娘さんに言っています。クリスチャンの女性に言っております。自分よりも霊的に上の人を求めると。自分よりも霊的にレベルが低いとか、そういう人はクリスチャンと名乗っていても、どんなに感じの良い青年でも、ニコニコしているようなクリスチャン男性でも、自分よりも霊的にレベルが下ならば、その人を結婚相手とは思わないで下さい。まあ、成長していく段階がありますけれども、少なくともその人が自分よりも霊的に上となって、強くなって、自分をリードしてくれるようなクリスチャンの男性でなければ、もう結婚相手とも見なさなくて下さい。そう言いますとますます結婚相手はそれこそいなくなってしまうような、だんだんあまりにも高望み過ぎてどうしようかと悩み始めている人もいるかもしれません。残念ながらクリスチャンの中にもいろいろなレベルの人たちがいます。聖書の言葉が全て神の靈感によって書かれたとは信じていないような人たちもいます。ある者は、これは人間が書いたものです。人間が書き換えたものです。編集したものでこれはただの神話です。寓話です。物語です。ストーリーに過ぎませんと言うような理解をしているようなクリスチャンもいます。その人たちは救われていないわけではありません。救われていてもそう思っている人たちがいます。でも、この MGF では、聖書はすべて神の靈感によって書かれたもので、一言一句これは神の言葉であると。ですから、神様が天地を 6 日間で造られたことも私は文字通り信じておりますし、イエス・キリストが文字通り私たち教会をこの地上から引き上げて、携挙して下さることも文字通り信じております。でも、中には「教会ではそんな事はとても信じられない。それは認められない。」という人たちもいます。仮にそのようなクリスチャン男性とこの MGF の出身の若い独身の女性が結婚するとして、私はその先が危ぶまれます。ここでは同じ父の部族の、父の氏族の者と結婚しなさいと。ノンクリスチャンと、異教徒と結婚するのは、もう論外ですから、もう MGF ではそんな話はしません。「ノンクリスチャンと結婚して良いでしょうか。」なんて言ったら、もう聞きません。(初めて聞いた人はびっくりするかもしれませんが、何度もこのことは言っております。)でも、更に 1 歩進んで、クリスチャン同士であったとしても、父の氏族と。ただ誤解がないようにして頂きたいのは、MGF の中でしか見つけられないと思ったら、これは極端な話ですから、ここは誤解しないで下さい。そうするともう人数が限られてしまうので、選択の余地がなくなってしまうので、そういうことを私は言っているのではありません。今私が説いていると同じ信仰を持っている人たちは世界中に大勢います。日本人だけが結婚相手ではありません。国際結婚もありますし、勿論結婚が全てではありませんけれども、ただここで皆さんにチャレンジしたいのは、あなたはこの主の御言葉をどのように受け止めるか。

信仰を持ってこのツェロフハデの娘たちは、じゃあどうしたのか。もう一度テキストの方に目を戻して頂きたいと思いますが、彼女たちは素晴らしいことに **10 節『ツェロフハデの娘たちは、主がモーセに命じられたとおりに行なった。』**とあります。その結果、彼女たちが祝福された事は間違いありません。是非今日の御言葉を厳粛に受け止めて頂いて、そしてただ右から左にではなくて、これは他人事ではなくて、独身の皆さんにはこれは他人事とは思えないと思いますが、結婚してしまっている人たちにしてみたら「もう既に手遅れです。もっと早く知りたかった。」と言う人もいるかも知れませんが、あなたの子供に、孫にこのことを是非伝えて下さい。説教して下さい。そして彼らのために祈って下さい。もしこの言葉に従わなければ、あなたは約束の相続すべきものを受け取れなくなるということです。ただ説教するだけではなくて、ただ何度も何度も耳が痛くなるほどに子供に言い聞かせるだけではなくて、真剣に彼

らのために親のあなたが、お父さんお母さんが、おじいちゃんおばあちゃんが、祈って欲しいと思います。「でもうちの子供はまだ6ヶ月なんです。まだまだ結婚なんて。」と、思うかもしれませんが、もう6ヶ月遅れているということをお伝えしておきます。6ヶ月も祈らなかつたということです。あなたの子供のために、孫のために、将来この子は確かにイエス・キリストに出会って救われて、確かにこの子は自分にピッタリの同じくびきを負う伴侶を見つけて、そして幸せな結婚生活を送っていくんだということを、まずは親が信じて期待して確信を持っていかなくてははいけません。そのためには祈って下さい。そして真実を語って下さい。警告を与えて下さい。妻は私と結婚する前に、自分の将来の伴侶のために祈っていました。どういう人が自分にピッタリの伴侶か、彼女は紙にびっしり書いていました。自分の理想の将来の夫はどういう人か。こういう人が良いということがびっしり紙に書いてあります。それを私も大事に取っています。いずれにしても、あなたは祈っているのでしょうか。独身の皆さんも是非将来の伴侶のために、まだ見ぬあなたの夫のために、まだ見ぬあなたの妻のために祈って欲しいと思いますが、親もまた、おじいちゃんもおばあちゃんもまた。「うちの子供はまだ何ヶ月です。」ではないんです。もう何ヶ月も祈っていないならば、大分出遅れていると思って下さい。

「なぜそんな事をあなたは言うんですかと。」聖書の中にその模範があるからです。ノアという人は、実はセム、ハム、ヤペテという息子たちが生まれる20年も前から神様の命令に従って箱舟づくりをしておりました。その箱舟には、息子たちの部屋。息子が何人いるかまだ勿論知らないわけです。子供生まれてませんから。子供が生まれる20年も前から箱舟づくりを始めていて、息子たちのために、そして息子のなんと妻たちのためにも、彼らが生まれる前からノアは努力して、一生懸命木を切り出してきて、額に汗水垂らして働いたんです。コロサイ4:12に私たちは祈りに励む必要があるということを教えられています。『あなたがたの仲間のひとり、キリスト・イエスのしもべエパfrasが、あなたがたによろしくと書いています。彼はいつも、あなたがたが完全な人となり、また神のすべてのみこころを十分に確信して立つことができるよう、あなたがたのために祈りに励んでいます。』祈りに励むの“励む”という言葉は“agonizomai”(アゴニゾマイ)という言葉が使われていて、これは英語の“agony”, “agonize”というまさに苦しみ悶えるという言葉の語源です。文字通りは血を流して戦うという、格闘競技において格闘する時に使う言葉です。その変化形の“アゴニア”という言葉は、ルカ22:44に使われていて、ゲッセマネの園でイエス・キリストが苦しみ悶えて血を流して祈られた、その祈りのところにもこの言葉が使われているんです。(『イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。』)祈りというのは口先だけの簡単な仕事じゃないんです。祈りというのはまさに血を流して格闘するようなものです。ノアが額に汗を流して重労働をもって箱舟づくりに励んだように、私たちも自分の家族のために、自分の子供たちのために、孫のために、その孫たち・子供たちの将来の伴侶のために私たちはそれほどまでに祈りに励む必要があります。ただ口うるさく言うだけではありません。そこまで祈っていくということです。ノアはそのことを信仰を持って行いました。そのノアの信仰についてはヘブル11:7にハッキリ書いてあります。(『信仰によって、ノアは、まだ見ていない事がらについて神から警告を受けたとき、恐れかしこんで、その家族の救いのために箱舟を造り、その箱舟によって、世の罪を定め、信仰による義を相続する者となりました。』)まだ見ぬ子どもたち。子どもが生まれる20年前から、まだ見ぬ子供の将来の伴侶のこと。彼らのことを思って励むことができたのは、信仰がそこに与えられたからです。ノアは信仰を持って自分の子供たち、そして将来の伴侶のために額に汗を流して祈りつつ箱舟づくりに励みました。それと同じように私たちも自分の子供のために、子供の伴侶のために、妻のために、夫のために、孫の伴侶のために、ライフパートナーのために私たちは親としてしっかりと説教し、しっかりと祈る必要があります。

今私がお話しているのは、私のただの子育て論ではありません。これは聖書の御言葉に基づく神の子育て論があります。ヘブル12章を木曜日に見ていますが、そこでは聖書的な子育て論ということをお話していますので、第一回目は終わりましたから、第二回目もまた今週あります。是非興味ある方は聞いて頂きたいと思いますが、是非今お話したことを子供たちに、孫たちに伝えて下さい。そしてただ伝えるだけではなくて、イエス・キリストが苦しみ悶えながらゲッセマネの園で祈った如く祈って下さい。「私の子供は、今は教会から離れてしまっているけれども。私の子

供は、今はまるで反キリスト的な生活をしているけれども、それでもこの子は絶対に救われるんだと。そしてこの子にピッタリのクリスチャンの同じくびきを負う、同じハートを持つ、同じ信仰観を持つ、素晴らしい伴侶に恵まれていくんだ。クリスチャンホームを築いていくんだ。」ということを、まずはあなたが信じなければどうやって子供にそのことを伝えられるでしょうか。まずはあなたが確信を持って期待をして、希望に胸を膨らませていなければ、どうして子供にそのことを、孫に伝えられるでしょうか。MGF の中から若い男女が、救われたイエスのくびきを負った者同士が結婚してクリスチャンホームを築いていく日は私は楽しみに待っております。もうその前に携挙が来るかもしれませんが、でもMGF 以外でも同じ信仰を持った、同じ神観・聖書観を持った、同じハートを持った。そして男性が霊的リーダーとして女性を引っ張ってくれるようなそんな素敵な夫が。そしてそのような夫を支えていく助け手となる将来の妻が結ばれていく姿を私は楽しみにしております。そのことを皆さんも親として、おじいちゃんおばあちゃんとして期待して頂きたいと思います。聖書に命じられた通りのことを行った。これが重要であります。今私たちはその“行う”ということに神様からチャレンジされています。ただのセオリーではありません。実践しなければ、机上の空論です。御言葉を実践なさい。実行する者になりなさいと、ヤコブ 1:22 に書いてあります。『また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。』御言葉をただ聞くだけの者ではなく、実行する者になりなさいと。そしてイエス・キリストは「あなた方が御言葉を行う時に、私から聞いた言葉を行う時にあなた方は祝福されるのです。」このことはヨハネの福音書 13:17 に書いてあります。『あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それを行なうときに、あなたがたは祝福されるのです。』イエスは「あなた方は私の言葉を聞く時に祝福される。」とは言いませんでした。「あなた方は私の言葉に賛同する時に、同意する時に、アーメンと言う時に祝福される。」と言ったんじゃないでしょうか。イエスは行う時に祝福される、幸せになれる、ハッピーになれる、満たされるといふように約束されたんです。ですから今皆さんがただ聞くだけで終わっているならば、何の価値も意味もありません。神様の約束されている祝福をあなたは味わえませんし、あなたの子供も孫も味わうことは出来ません。このことを皆さんにお伝えしているのは、まだ手遅れではないということでもあります。セカンドベストで満足しないで下さい。今、充分生活はまわっていますと。クリスチャンとノンクリスチャン同士の家庭も表面的には幸せそうに見える、そういう家庭もあります。そういう家庭に、離婚してやり直せと言っているのではありません。結婚してしまったらもう終わりです。それが御心ですから、その中で神様に喜ばれる生活を送って下さい。そして聖書に書いてある約束を握って、「主イエスを信じなさい。そうすればあなたもあなたの家族も救われますと。」“そうすれば”という言葉は実際には「そして」という言葉が正しいんですけども、あなたがクリスチャンになったら自動的にあなたの家族が救われるわけではありません。でもあなたが本気でイエスを信じれば、あなたの家族もそして信じると言っているんです。このことを是非厳粛に受けとめて欲しいと思います。

ノンクリスチャンでも離婚の最大の原因は、性格の不一致だと言います。「性格が合わないから離婚しました。」よく聞く話です。性格の不一致が圧倒的な離婚原因の第一位を占めているんです。クリスチャン同士でも信仰の間にギャップがあるならば、子供の教育に対して、子供の将来に対しても、意見が合わなくなります。老後において、若しくは身近な「今度の連休はどうやって過ごしましょうかと。」クリスチャン同士でもズレがあるわけです。ですから是非私たちは同じくびきを負っていくこと。夫婦がバラバラならば、夫婦がつり合ったくびきを負っていないならば、その影響はお互いにも及びますけれども、子供にも孫にも行くということです。教会の子供たちのためにも是非祈って下さい。私の背後には壁1枚挟んで多くの子供たちが、将来素晴らしい約束を期待されている子供たちがいっぱいいます。どうか彼ら一人一人のために。全員が結婚するかは分かりません。でも是非彼らもまた主の恵みの中で成長して、そして同じくびきを負う伴侶を、そのまだ見ぬ伴侶のためにも。この子が将来結婚する奥さんのために祈りますと。この子が将来結婚する夫のために祈りますと。そのようにして将来の伴侶のために、ライフパートナーのために、私たちは教会の子供たちのためにも真剣に祈り、彼らにもノンクリスチャンと結婚しようなどと思うことは夢にも思うなど。もう論外であると。そうではなくて、むしろ更に1歩進んで、あなたと同じ、若しくはあなた以上に信仰の深い者を探しなさいと、女の子たちには言って下さい。男の子たちには、あなたが将来霊的なリーダーとなって、奥さん

をリードするのにふさわしい、そんなクリスチャンとして成長出来るように。そのように私たちは彼らのこと覚えて祈っていく必要があります。今すぐ始めて下さい。「私の子供はまだ小さいですと。」そんなことはありません。生まれる前から、子供が与えられる 20 年も前からノアは祈って、実際にそのために汗水垂らして働いていたんです。私たちも忘れてはいけません。「まだ私は結婚していません。」と言う人もいます。結婚して、そして将来子供が与えられて、そして孫が与えられてと。そのことまで考えて下さい。是非そのためにも御言葉に立って、主に与えられた信仰をしっかりと主に守って頂き、成長させて頂いて、そして祈りに励んで下さい。祈り過ぎるということはありません。私たちはあまりにも祈らないわけです。「もはや祈るしかないかな。」とか、「もう最後は祈るだけだ。」と、そういう考えのクリスチャンが大勢いますけれども、さておいて私たちはまず祈る必要があります。どんな努力も祈りの前には虚しいです。是非祈って下さい。たとえあなたの子供が反逆児でも。世俗に染まっていますが。まずはあなた自身がイエスのくびきを負って。まずはクリスチャンの夫婦が自分たちの関係を見直して、「自分たちは同じところを見ているだろうか。同じ信仰を持っているだろうか。」男性のクリスチャンは自分の妻を見て、自分が妻よりも霊的に下であるならば、それを恥とと思って下さい。妻の方が私よりも聖書を知っているとすれば、それは恥ずかしい事だと思って下さい。「でも私は仕事があるんです。妻は暇だから一日置きにバイブル・スタディに行っているんです。」と、それは言い訳だということを言っておきます。そんな言い訳をしていても何の益もありません。あなたの子供たちを見て下さい。あなたの言い訳は、彼らには何の益にもなりません。彼らに幸せになって欲しいければ、また彼らがこれから将来結婚して、子供が生まれて、孫が与えられていくことを是非考えて下さい。今日はこれで終わりにさせて頂いて、これが最後の**民数記**のメッセージだということを、このこともまた意識して下さい。携挙がなければ次回は**申命記**、楽しみにして頂きたいと思いますが、約束の地に入る前にあなたが御霊に満たされて、御霊に導かれて、御霊の力をもって歩む上では、どうしても避けられないことです。逃げてはいけません。最後にお祈りしましょう。